

和歌における散らし (3)

高木厚人
Atsubito Takagi

A 作品題名 月

① 素材

九重に霧やへだつる雲の上の
月をはるかに思ひやるかな (源氏物語・賢木・藤壺中宮)

② 歌意

宮中には霧がかかって私を隔ててしまったのでしうか。雲の上
の见えない月に遠く思いを馳せることですよ。帝との間に深い隔た
りができてしまいました。

③ 行構成

寸松庵色紙五行構成低下式の「ほとゝぎす」を参考にした。各行
間の間を等しくし、行を進めるにしたがって右下への行の傾きを大

きくしていった。

④ 文字構成

各行の密度はほぼ同じように努めた。文字の大きさを一行目、二
行目、三行目、四行目と中・大・大・小にすることで全体が一塊に
なるように試みた。

⑤ 線

厚みのある線を生かす為、要所要所に細い線を入れようと努めた。
直線を多用するよう心掛けた。

⑥ 墨量・用筆

墨色は紙に合わせ、濃すぎず薄すぎずを目標とした。墨量は一行
目から四行目までの行頭部分が、中・弱・強・中となるよう調整し

た。筆はあくまでも直筆を目ざした。

⑦制作意図

中央部に墨を入れることで力強くエネルギッシュな作品が生まれればいいと願った。

B 作品題名 かざこしの峰

①素材

風越の峯のつづきに咲く花は

いつ盛りともなくや散るらむ（西行・山家集）

②歌意

いつも風が吹き越してゆく風越の峯の続きに咲いている桜は、いつが盛りということもなく散ってしまうことであるうよ。

③行構成

寸松庵色紙六行構成高低式の「ともものり」を参考にした。一行目に対し添わせる二行目、三行目に対し控える四行目と意図した。二行目と三行目との間あいだの間をやや広くとった。

④文字構成

一行目の放ち書きに対し二行目は添わせる気持ちで連綿を用いた。文字は一行目に対しとにかく簡素なものを用いた。三行目は上部に特に大きな文字を配し、続く下部は文字を小さくし潰すようにして密度を高めた。四行目は三行目を生かすため細く小さくまとめた。

⑤線

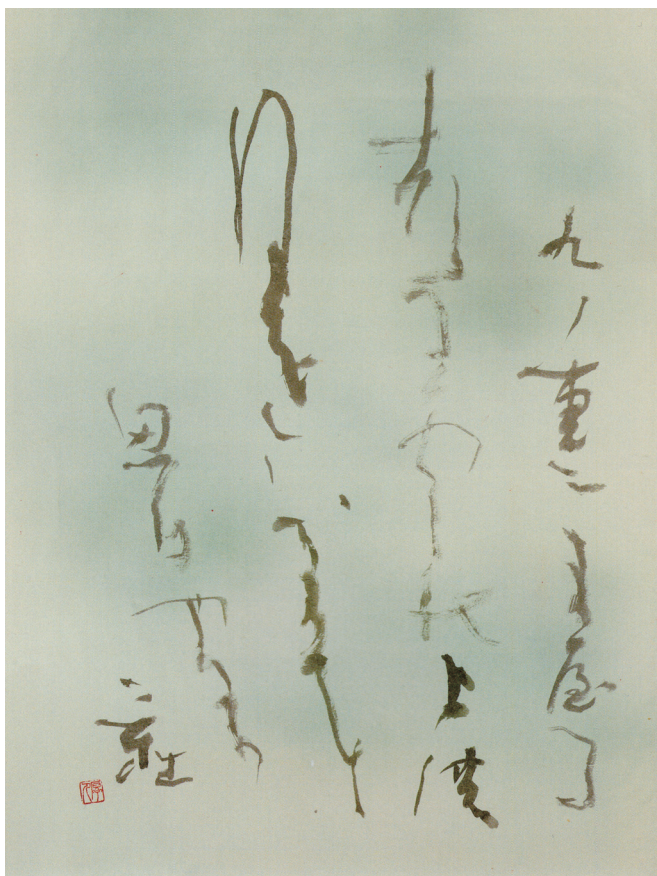
厚みのある線を生かす為、要所要所に細い線を入れようと努めた。直線を多用するように心掛けた。

⑥墨量・用筆

墨色は紙に合わせ、濃すぎず、薄すぎずを目標とした。一行目から四行目までの墨量は、中・弱・強・弱となるよう調整した。筆は目ざすは直筆である。

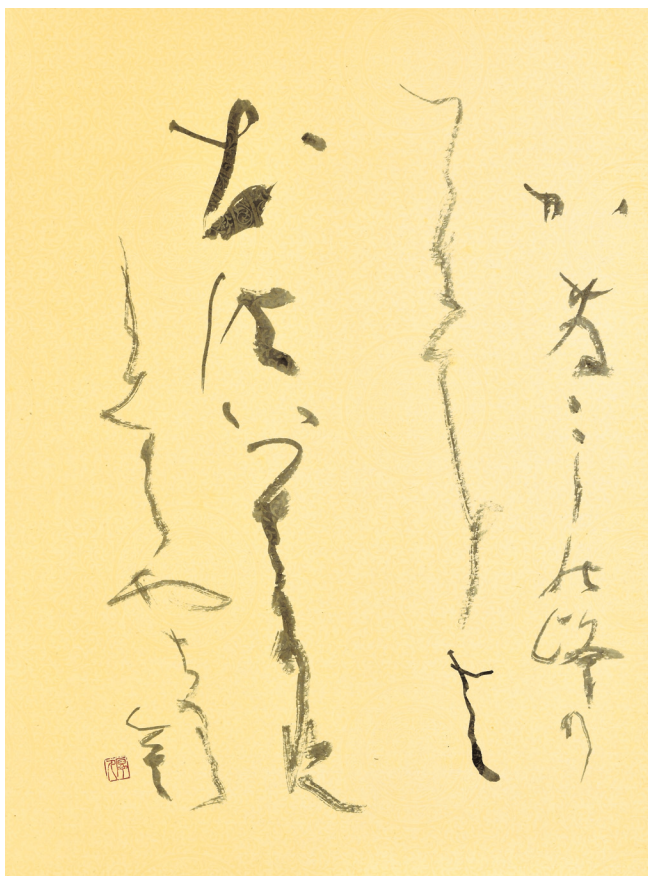
⑦制作意図

中央部三行目の「花はいつさかりと」がすっきりと澁刺と見える様、周囲を調和させられればと思いつながら筆を進めた。



95×72cm

九重ニに八きり可や耳へ多だ郡つる能雲難の上のの
 月をはるかに思ひやるかな



93×70cm

かざ^敢こしの^能峰の^力つゞきに^支さく^久花は
 いつ^可さ^利かり^登とも^奈なく^久や^半ちる^半ら^半む